

春燈

三月号

3

March 2008



安住 敦の句

鳥帰るいづこの空もさびしからむに

句集『歴日抄』昭和四十年

南高北低の気圧配置、上空の強い南風、絶好の渡り日和に、帰心頂点に達した鳥の群れが雲に入る様は、見る度に感傷を誘います。そして筆者はこのお句をしみじみと思わずには居られません。特に「に」の持つ存在感と、そこから自然に生み出される韻律は、俳句における一字の大切さ、重さを改めて考えさせられます。先生のお優しさとさり気ない厳しさも感じる事が出来ます。

浅野 洋子

安住 敦の句

ひやびやと日のさしてゐる石榴かな

『古暦』昭和二十九年

初めてこのお句に接したとき目の前に大きく、つややかな石榴がクローズアップされた。そして「ひやびや」という響きに秋の日の芯の冷たさが感じられ思わずぞくつとしてしまった。あの感動は今も忘れられない。やがて「ひやびや」と日がさしたのは石榴だけではなく先生ご自身、あるいは先生のお心の中だったのではないかと考えるようになった。石榴の頃必ず思い出す一句である。

井上春子

西ヶ原日記

(40)

鈴木榮子

徹宵の終夜運転大みそか
京に似し寺の脇道年迎ふ
年越ゆる鐘楼へ手を取られけり
佳き賀状忝けなしと拝受せり
餅食べてサンドイッチ食べ三ヶ日

シクラメン水揚げさせむと預けけり
朱が登り染む象牙印初出勤
七草や点滴二時間うつつの間
咳き込みめり喉に交通整理なし
ポインセチア今年まだ見ずまなうらに
松過ぎの摩利支天様に障除け
若き友らの謂ふこと聴きて風邪癒す

龍の背

平野加代子

九龍伝説の香港春立ちにけり
龍脈の潜む街並み春の雷
龍の背に仮寓十年春がすみ
風水の師父の羅盤や春動く
一帆風順てふ春節護符の金の文字
老若男女榕樹の下に百千鳥
広東語で道を問はる日永かな
啓蟄や日本国籍忘れさう
龍の背の街を抱くや春の虹
九龍の一龍天に登りけり

京水引

田嶋
洋子

卓に蜜柑いつもの部屋の常の景
言の葉を惜しみし母や石路の花
家遠く捨つるタクシー冬銀河
お汁粉や双子のやうな姉弟
柊の花や橋の名残る町
箸袋の京水引や今朝の春
働きものでありたきごまめ噛みにけり
新年会をぢをばいとこまたいとこ
深窓の品位にまみゆ寒牡丹
鶴凍てて来るべき時待ちにけり

当月集

鈴木 榮子選



○ 横田 初美

裏木戸を洗ひ残して年の雨

佳きことの続きてをりて悴める

流木に枝葉残れる淑気かな

茶畑のまろき日ざしも寒に入る

日脚伸ぶ書肆は暖簾を畳みけり

○ 沼田 桂子

家といふ回り舞台や年明くる

海へ落ちさうな駐車場初日の出

ジョギングの過ぎゆる初渚かな

湯気の饅^{バス}飴窓外に海広これり

李太郎生家築百年の冬日影

○ 宮田 豊子

大旦那福耳大人迎へ

試行錯誤頰杖冷えて居たりけり

本膳の鮭の粕汁伊那の里

蕎麦搔きを仏に供ふ信濃振り

霰降る人に本音で接しけり

○ 秋場 貞枝

雲水の錫杖霜の声なりけり

小春日や茅葺き屋根の深呼吸

高齢者劇団若し返り花

昭和一粒話題の尽きぬ十二月

卯波の灯消えて銀座の年暮るる

○ 佐々木 新

神域に風の辻あり朴落葉

落葉搔き風読める人読めぬ人

権禰宜が社の由来里神楽

タカジアスターゼかりかり漱石忌

故郷や心の草の焚火跡

春燈の句

鈴木 榮子選

石路咲くや海上禪林東禪寺

冬ざれの墓に香煙分かちけり

胸中のあした待たるる冬木の芽

水琴窟のいらへかすかや山眠る

初夢の初恋の人瑞々し

出初式締めは頭の木遣節

獅子舞に囃んでくれろと膝を出す

寒鰯の出自よろしき富山湾

枯蠅蟬朝のひかりにとび立てり

雪吊にそそぐ庭師の眼かな

売り声の追ひかけてくる年の市

羽子板市あまたの視線飛びかへる

慟哭の一日となりて年暮るる(悼)

心づくしのおせち届きし大晦日

暗転の午後は吹雪となりにけり

三日はや行かねばならぬ葬なりし

東京 神山 志堂

千葉 島田 山流

千葉 西岡 啓子

広島 平 絵美子

四時半の日没冬至の海残照

生鳥賊のわた抜く手元冬至の日

天気図に立縞模様空つ風

関八州空底抜けや初筑波

蔵の町馬体湯気立つ交差点

開戦忘不俱戴天の敵あらず

雪起し牛の駆け出す牧の暮

待春やしづかに今は俘虜ならず

ビルのみを残す地球か冬の海

藁田ふ気品凜たり寒牡丹

蕎麦搔の喉越し葱の香味かな

一輪の梅探る間に靄晴れむ

白足袋の蹴美し躪り口

書初め撥ね高々と反抗期

唐墨のけさ若水に匂ひけり

最果ての啄木の街雪明り

埼玉 新井 清

福島 物江 康平

東京 塚本みのる

東京 米澤しげる



余言

鈴木 榮子

胸中のあした待たるる冬木の芽

神山 志堂

泉岳寺の吟行での作である。巷間流布されているところの「忠臣蔵」の中で雪の両国橋の上で松浦家の俳句宗匠が、「――年の瀬や水の流れと人の身は――」と読みかけると、源吾が「――あした待たるるその宝舟」と付句する。その翌晩吉良邸隣の松浦家の茶句会席上にわかに聞える陣太鼓、はたと気がつき雀躍して喜ぶ芝居がある。その時松浦邸玄関に義士より隣家討入りの挨拶に源吾が来るという筋書である。かくて義士は本懐を果すのである。

寒雷を遠く近くに割子そば

高木 曾精

割子そばは、段重ねにした漆塗の小さな破子に少しずつそばを入れ薬味とつゆをかけて食べるのだ。そばというものは日本の食べものとして粹で小腹のすいた時、軽く頂く

のに日本人には良い御食の用意と思っている。それに配された寒雷。「さび」の利いた季語が配されたものだ。

風の韋駄天走り御堂筋

北岸 邸子

東京と言えば「銀座」。大阪と言えば「御堂筋」と相場が決まっている繁華街である。御堂筋という町名は何か活気を感じさせる街の気配がしてわくわくする。

銀座より御堂筋の方が親しみと情と活気を感じる。そこを風の韋駄天走りなどと、よくその様子を表している。シックな恋人と、パンチのある恋人のようである。

小春日や電池で走る新幹線

宮沢 治子

この句、新幹線が出てくるが言葉が駅だのスピードを言っているのではない。新幹線の性能を云々しているのでもない。

意外性は電池で走るオモチャの新幹線であるところにある。機先を制せられたユーモア、或いは意外性がこの句のおもしろさである。子供が遊ぶ新幹線である。そこにこの句の間を外された面白味がある。